

# 2022平和行動in根室

## 参加者からの ピースメッセージ

北方領土に関しては、日本固有の領土でありながら、第2次世界大戦後から、旧ソ連による不法占拠・実効支配が続いており、北方領土返還運動の取り組みが行われていることは知識として持っていましたが、今回、平和行動に参加させていただき、初めて実際の北方領土を目にし、経緯や当時の状況などについて、映画の視聴や学習会の聴講、元島民の訴えなどを自分の目と耳で確認、感じたことで、改めて理解を深めるとともに、思いを新たにしました。

納沙布岬からは島が見え、直ぐにでも渡ることができる距離であるのに、故郷へ戻ることも自由に訪ねることもできない。そんな思いを戦後70年以上持ち続ける元島民の方々の想いに対し、一刻も早い返還と北方領土問題の解決が必要だと気付かされました。その想いは返還要求運動として、私たちも繋いでいかなければならない、また、決して風化させてはいけなと感じました。

今回の参加で見聞きし、感じたことを自分だけのものにせず、家族や友人を含め、多くの方に伝えていくことが重要であると思います。他人事ではないと思いを新たにし、一人でも多くの人が北方領土問題に関心を持っていただけよう、機会を捉えて今回の経験を伝えていきたいと思ひます（T.Aさん）

今回、2022平和行動in根室（9/10～9/11）に参加させていただきました。北方四島交流センターにて開催された講演では、近隣諸国の社会動向と海洋資源や地域産業との関係性ととも、ロシアとの緊張下で続く漁業活動について説明いただいたことが印象的でした。

『2022平和ノサップ集会』では静かなオホーツク海を背景に、当時の北方領土侵攻を経験された方の言葉は重く、そして北方領土返還への強い思いに胸うたれるものでした。また、ロシアのウクライナ軍事侵攻に対する経済制裁への反発から、元島民の方の『ビザなし交流』が停止させられたことを聞いた際には、今まで以上に戦争というものを身近に感じました。

2日間の経験は、北方領土返還は今なお進行していることであると、考えを改めさせられるとともに、語り継ぐことの重要性を再認識させていただきました。（K.Sさん）



1日目、空港から北方四島学習会会場へ向かうバスの車内で『ジョバンニの島』という一般社団法人日本音楽事業者協会創立50周年記念作品として制作・公開された長編アニメを鑑賞した。第二次世界大戦後、北方四島の色丹島での実話を基に、ソ連軍の進駐により引き起こされた島民の過酷な運命が描かれていた。主人公の少年は、『語り部』として活躍されている得能宏さんをモデルとし、色丹島での経験を基に制作されているため、当時の島民の辛さや悲しみが伝わってきた。是非、鑑賞した事のない方に見て頂きたいと思う。

北方四島学習会においては、「海から考える北方領土返還運動」というテーマで東海大学の山田教授より講義頂きました。ロシアのウクライナ侵攻により、北方四島交流事業(ビザなし交流)は中断しているが、KAZU1の遭難者のサハリン経由での返還、サケ・マス漁や貝殻島周辺での昆布漁、国後島民(ロシア人)の北海道内の病院での診療等民間でのつながりは生きているとの事であった。ロシアのウクライナ侵攻と言う行為は許される事ではないが、北方四島返還については様々な形でロシアとのチャンネルを切らない事の重要性を感じた。

2日目の『2022平和ノサップ集会』では、主催者や来賓の方々の挨拶の中でも触れられていたが、強制退去させられた島民17,291名の内、現在の生存者は6,000名程度であり、平均年齢は87歳になる現実を知った。元島民の鈴木さんの訴えの中で、「ロシアのウクライナ侵攻により北方四島交流事業が中断され、墓参出来ていない。生きているうちに孫を連れて墓参したい。」との強い訴えが心に残っている。

北方四島のこのような現状を多くの方に知って頂くと共に日本国政府には北方四島の早期一括返還と日ロ平和条約の締結を切に願う。(T.Mさん)

私は、初めて平和行動へ参加させていただきました。今まで恥ずかしながら北方領土問題について深く考えたことが有りませんでした。しかし、今回平和行動に参加させていただくこととなり、講演、映画、住まわれていた方々の声を聴くことが出来、大変衝撃的であり、なおかつ今までの自分が小さいものだなと感じさせられました。

戦争が終わったと一息ついた矢先、突然住んでいた家を占領され、今までと180°も生活が変わり、家族とも離れ離れとなり、たくさんの仲間も亡くなり、考えれば考えるほどやるせない気持ちで一杯になりました。また、現在は先祖へ会いにお墓参りもできない状況だけでなく、元島民の方々の平均年齢は87歳と高齢となっています。このロシアによる不法占拠の問題は今後もしっかりと忘れてはいけないことの一つであり、しっかりと日本国民全体が同じ認識でなければいけないと感じています。私が出来る唯一のこととすれば、この出来事についてより多くの人に情報を発信し続ける必要があると考えます。(D.Tさん)



ふるさとへの想いをつなぎ、四島交流・返還を進める決意を胸に開催された「2022平和ノサップ集会」に連合岐阜を代表して派遣いただき、関係者皆様に感謝いたします。  
北方四島は日本固有の領土であるが、第二次世界大戦終結直後にソビエトが侵攻し約1万7000人の住民が故郷を追われた。それ以降、今日に至るまで不法占拠が続いている。

集会では択捉島の元島民の鈴木咲子さんの貴重なお話をお伺いできた。  
ソビエトは終戦の8/15から13日後の8/28に択捉島に上陸・占拠し、9/5までに国後島、色丹島、歯舞群島の全て占拠した。その後、昭和22年に日本人の強制退去が始まるまでは同じ村に日本人とソビエト人が暮らした。仲が悪かったという訳ではなく、それなりに楽しく過ごせた「ほっこりした思い出」が救いであると述べられたのが非常に印象深く残った。

集会後、根室を離れ網走に向かう際に立ち寄った別海町の「道の駅おだいとう」に一つの像をみつけた。「北方四島返還「叫び」の像」と名付けられたその像は「島を返せ！」と叫ぶ老女と孫達の像である。  
返還運動の強い意思を風化させる事なく、次世代に引き継ぐような時代となってしまったのに哀しみを感じた。  
やはり領土返還と日ロ平和条約の締結なくして真の平和はない。  
我々、労働組合にできる事は声を上げ続けること、そして語り続けることであると再認識した。

結びに、帰りの飛行機で推敲した一首を披露したい。

《花更紗 彩り桃や 華やかに ふるさと想う 納沙布の海》

(想像とはなるが)鮮やかな花更紗を持ちたいと思っていたうら若き女性達は戦争と言う統治下の中、自由も制限され、ふるさとを失った。それは未だに返ってこない。元島民の平均年齢は87歳。  
今になり国は豊かになり、当時持てなかった花更紗柄を纏い納沙布を訪れる。

未だに変わらないのは、戦争により抑圧された乙女心と思い出の記憶、その岬から見えるふるさとの姿形だけである。(Y.Tさん)